

## 非行少年のきょうだいとして生きることの意味

### － 負荷された課題を抱える力に着目して －

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
小山田 真理子

近年，社会全体の犯罪への関心と不安の高まりにより加害者家族に対しより厳しい非難の目が向けられている。一方，非行少年のきょう代いは，両親への原因帰属や責任という論点に隠れ，光が当てられてこなかった。

本研究では社会や家族との関係のなかで非行少年のきょう代いがどのような体験をし，自身の人生の物語をどのように構築してきたのかを明らかにした。非行少年のきょうだいという存在を可視化することで，彼らへの理解を広めることを目的としている。20歳以上の元非行少年のきょうだい3名に対し半構造化インタビューを行い，各々のライフストーリーを作成した。

結果，1) きょうだいらの罪を犯した同胞に対する認識は社会からの「非行少年」などというラベルとは異なること，2) 家族の中での役割を担うだけでなく，社会の中での家族役割として同胞を受容し，共に責任を負うこと，3) 同胞の犯罪経験を人生の糧として意味づけていることが示唆された。

きょうだいへの支援としては 1) 同胞と切り離れたきょうだい自身の人生を送ることができるよう助言すること，2) 非行少年の家族としてではない「普通の生活を送ろうとする彼ら」を支える体制があること，3) きょうだいたちが自身の当事者性を意識し，葛藤を言語化しようとするとき対話できる場所を確保しておくこと，4) 「ケア提供者」としてのきょうだいに対し，助けを求めてもよいのだと助言すること，の可能性が示された。